

¡Hola amigos!

R と N の Málaga からの手紙

(015号)

皆さんこんにちは。

このページは、私達のスペインでの日々の暮らしを友人・知人の皆さんに知って頂こうと思って開きました。ですからごく私的なもので、読者のかたも大なり小なり私達をご存知だという想定で作成しています。そのつもりでご覧下さい。

各項の更新は不定期ですが、なるべく毎週末迄に何らかの更新をするつもりです。

更新日を確認の上各項目を選択してください。

2003年 9月19日 R & N

目次	更新日
身辺雑記	2003年 9月19日
エクスカーション	2003年 9月19日

ご注意 : 各項目のファイルは更新日から一ヶ月を経過したら削除します。

悪しからず。

* 身近雑記 *

「中秋の名月」の巻 2003年9月19日 更新

ガリシアの旅が終わって久し振りに我が家に帰ってきたら、たった一週間のうちに周りの様子が変わってきたようだと言いましたが、やはり間違いなく変りつつあります。短期滞在者用の部屋の詰まり具合は、うちの前の棟を見る限りあまり変わっていないようですが、滞在客の年齢層が少し変わったように思います。

夏中騒がしかった若者の集団から若い夫婦らしい年代層になっているみたいです。この世代は学齢に達した子供はまだいないし、バカンスさえ取れば一番気軽に動きやすい年代かも知れません。夏の盛りを過ぎてからのほうが諸事万端安上がりだし。

でも日本ではそんな年代で長期休暇など考えられませんね。

陽気も次第に秋らしくなって空気が澄んで来た事を感じます。しかし日中はやはり日射しがきついで散歩はどうしても夕食後になってしまいます。

先日の満月の夜も爽やかに晴れ渡り、正に中秋の名月でした。



(海岸遊歩道で見た中秋の名月。ススキはナシ、お団子もナシ)

夏の間、ここの暑さを避けて北の本国に帰っていたらしい老人たちも少しずつ帰ってきているようです。やはり、老人にはここは晩秋から春先までの所なのでしょう。

私達のタルヘタ（長期滞在許可証）の更新手続きのことは以前にも触れましたが、この申請には医療保険の加入が必要条件になっています。今まで、即ち初年度は日本で掛けてきた一年間の海外旅行者保険でよかったのですが、海外に出たまま新たに同じ保険に入るのは無理があるようです。しかもこのままこの国に住みつづければ、保険にはずっと加入しなければならないし、やはり、この国の医療保険に加入しておいた方が何かと都合が良いと考えて、そうすることにしました。

そこで私の年齢が問題になりました。最初に聞きに入った代理店は60歳以上で加入できる医療保険はない、と言うのです。その後アチコチ聞いて回ってこれは間違いで、65歳までは大丈夫と分かりましたが、初めはチョッと焦りました。昨日行った代理店では65歳未満で加入しておけば、65歳以上になってからも継続可能とのことでした。危なくセーフです。

勿論、国保の制度はあるのですが私達はまだ住民登録はしていないので、それに加入する事は現時点では出来ないし、この国の国保は指定病院がごく限られていて順番待ちが何日単位という長さで、実際病気になった時殆ど役に立たないと聞いています。

しかし、このまま腰を据えるなら住民登録もしなければと思っています。

ところで、最近保険代理店や旅行代理店、不動産売買代理店などに行く機会が多くて改めて気づいたことは、この土地のこの手の業界では英語が話せるということが必須ナンだなということです。店頭で英語での対応が出来ないとみすみすカモを逃がしてしまうわけです。何しろこの土地にお金を落とすのは外国人が圧倒的に多いのですからスペイン語での商売より金額的には断然大きくなります。バルやレストランでは、外国人の客といってもそんなにややこしい話があるわけではありませんから、客の方だって気にしません。けれども金額のはる話になると誰しも慎重になりますから、やはり自分の理解できる言葉で説明してもらいたいのは当たり前です。

だから、私達も結局そうせざるを得ませんでした。と言っても100%理解できているわけではありませんけどね。保険約款なんか日本語で書いてあっても判りません。



(バサール、むこうの木の生えている所まで約二百店、魚・肉以外なんでもアリ)



(大道芸人も。これはペルー人ミュージシャン。コンドルは飛んでゆく)

金曜日恒例のバサール(bazar=青空市)も人出がめっきり減りました。人が多いときは歩くのも難渋するくらいの人ひとヒトでしたが、先週はこの通り、スカスカでした。今週の私達は、タルヘタの更新手続きの用意にかかりきりです。隣町にある国警の分署で申請用紙を貰ったり、そのほかどんなものが必要なのか申請に必要な書類一式を聞いたり、何しろ書類を貰ってもその場でスラスラ判るわけではなく、一旦うちへ帰ってゆっくり辞書と首っ引きで読んでみて、不審な所は又出向いて聞きなおしてという繰り返しですから遅々として捗りません。申請は12月にすればよいという事は、はっきりしたので、まあ、何とかなるでしょう。我ながら、気が長くなったもんだと思います。鳩は忘れた頃にチョコッとやってきては暫くホホーホと鳴いていますが、長居はしません。巣造りの熱はもうないようです。というか、まあ、フラれちゃったんでしょね。それに引き替えヒゲの奴は相変わらず頻繁に現れます。では。

エクスカーション

「ガリシア」の巻・その二 2003年9月19日 更新

(二日目・午前) オ・グローベ(0 Grove)、ア・トーシャ(A Toxa)

今日の予定、八時起床、八時半朝食、九時出発、でまず午前はオ・グローベとア・トーシャ行き。午後は十七時からサン・ヘンホ **San Xenxo** という所へ行きます。

昨夜は長旅の疲れで、枕が変わったにもかかわらずグッスリ良く眠れました。こういうところが飛行機での旅と違って、時差がない分、一晚寝ればすぐに日常の体調に戻れます。私達の部屋は二階（日本式に言えば三階）で、外の道路に面していましたが我が家の周りとは違って車も人通りも少なく、暗くなってから明るくなるまでヒソソリとしていました。これも良く眠れた理由の一つでしょう。こんな静かな環境で寝たのは、本当に久しぶりのことです。これだけでもうすっかりここが好きになりました。

これから一週間滞在するカンバドス **Cambados** というところを地図で分かってもらおうと、ガリシア地方の地図を写してみましたが、このHPのサイズの画像にしてしまうと、何処にあるのか分からないので諦めました。とにかくガリシアの西海岸いわゆるリアス・バハスの真っ只中、ビーゴ **vigo** の北約50キロで海岸線の入り組んだ所です。ビーゴなら「社会科地図帳」でも出ていると思います。

ここにいた間、常に感じていた事ですが、気候風土も海や山や畑の景観も、緑も海産物の美味しさも、私達が知る限り能登半島の東海岸と敦賀地方を足して二で割ったような様子でした。違うのは石造りの家々と所々に生えているユーカリの木々だけ、何となく懐かしいような、日本の田舎へ帰ったような感じを受けました。もう一つ良く似た所はアイルランドで、これなら石造りの家まで同じです。その印象が間違っていなかったことがアトで分かりますが、そのことはまたいずれ。

コンチネンタル・スタイルでパンとコーヒーだけの簡単な朝食を終えて、さて、最初のエクスカーションです。

オ・グローベという所はカンバドスから見ると、小さな入り江を挟んだ対岸で、日本の田舎にもよくある静かな漁村です。景色のよさと海産物のお陰で観光地化したところで、日本ならこれに温泉がツキモノですが、ここではソレはなし。

第一日目の夕日の写真で、日の沈むあたりがこのオ・グローベとア・トーシャです。バスでわずか30分ほどのドライブ。バスはガイドやドライバーと共にマドリードからずっと一緒です。ガイドとドライバーはみんなと同じホテル、バスはホテルの脇に路上駐車です。これも日本ではあまりないことですね。

さて、オ・グローベ。ここは特に何もない漁村で、何もないところがイイ、といったふうの所です。だから、ついてすぐ30分ほど自由時間。自由時間にするしかテがないほど何もないんです。でも私達にはソレが一番。まず魚市場に飛び込みました。朝のセリが終わった後の静かな市場をみて歩きました。セリがあるかどうか知りませんが、まあ市場ですから朝早くには忙しい取引が有るでしょう。すぐ気づいたことは売り場に並んだ魚介類の新鮮さです。貝や蟹は勿論生きているし、魚も今さっきまでピチピチ跳ねていたという感じで、私達の町の魚屋とは全く異質です。

ここで、スペインにきてから初めて、(変な言い方ですが)ちゃんとしたマトモなアサリを見ました。アンダルシアで売っているのは、味はまずまずですが痩せて小さいものばかり。ここのは大粒でふっくら、いかにも旨そうでした。

その名もアルメハ・ハポニカ *almeja japonica* = 日本のアサリ。1キロ12ユーロ。

これにはビックリでした。誰かが日本からタネを持ち込んだのでしょうかね。



(思わぬ所でニッポンのアサリに対面。ニッポンと付くと高い、普通のものの倍額)



(蟹が箱からごそごそ這い出すのをオバちゃんがそのたびに掴んで戻していた。右手前は、カメノ手。今回これを食べ損ねたのが一番の心残り)



(魚市場の外通路からオ・グローベの入り江を見る。ウオイチよりこのまま別荘にしたいようなところ。右手の海に牡蠣・帆立・ムール貝の養殖イカダが散在する)

次はオ・グローベの海岸から長さ400メートル位の橋でつながったア・トーシャ。ア・トーシャは周囲2～3キロ程の小さい島ですが、その風光のよさから高級ホテル・高級別荘が並んでいます。スペイン語ではルーホ(lujo)ですが、高級という接頭辞がついたものができ始めると、じきに景観破壊が始まりあつという間に折角の鄙びた風情がなくなってしまいます。ここはまだホテルの数も少なく高層建築もないので何とか自然に溶け込んでいますが、何時まで続く事やら、です。ガイドさんが故事来歴

を説明するほどのものは無いので、遊覧船の出発時間まで小一時間の自由時間。

ここで少しガリシア語・ガリエゴ **Gallego** のお勉強。

オ・グローベ **O Grove** も、ア・トーシャ **A Toxa** も、ガリシア語。標準スペイン語ではそれぞれエル・グローベ **El Grove**、ラ・トーハ **La Toja** となります。このことからオ **O** は男性名詞の冠詞、ア **A** は女性名詞の冠詞だろうということは分かります。むずかしいのは発音です。オテルのフロントで絵葉書を買うときア・トーハと標準語の読み方をしたら、フロント・オバちゃんに、チガウ違う、ア・トーシャ、ア・トーシャと何度も直されてしまいました。長い事独立を叫んで中央政府に叛旗を翻しているバスコ **Vasuco** 程ではないにしても、中央即ちカスティーリヤの人間に対しては抜きがたい反感めいたものがあるんだなと感じました。ちなみに日本ではバスクと言うのが普通ようですが、バスクはフランス語、スペイン語ではバスコです。

本家のバスコ語ではなんと言うのかは知りません。多分バスコでしょうね。



(全面に貝殻を貼り付けた島の礼拝堂=**capilla** カピーリヤ)



(礼拝堂の壁。貝の水揚げだけで食べていた頃の漁民が建てたものらしい。

太郎と花子みたいな落書きはイズコも同じ)



(五つ星ホテル。潮が引くとパツとしないが、満ちると絶景、近くにはカジノも)
この島での自由時間に、四人連れの仲間が私達を手招きしていたので、何かと思ったら、その一人がチョッとシャッターを押してもらえませんか？と英語で言うのです。そして、私は英語がわかるので何か必要があればいつでも声を掛けてください、と言ってくれました。周りにほかの人もいたのに、私達にシャッターを頼むことできっかけを作ってくれたんですね。この自由時間にはほかにもスペイン語で声を掛けてくれた人が何人もいました。みんな、昨日からこの変な日本人に声を掛けたくてウズウズしていたみたいでした。私達がスペイン語は駄目だというのは、ガイド・ネーから既に全員に伝わっている筈で、だから気を付けて上げてね、ぐらいのことは言われていたのかも知れませんが、それにしても自発的に私達の援護をしてくれようとしているのがよくわかり、とても気持ちのいい朝でした。

そうそう、もう一つはついた晩の最初の食事どきのことです。各テーブルは四人席になっていましたから、私達は必然的に誰か別のカップルと相席になると思っていました。ところが食堂の女の子がまっすぐ私達のところへ来て、こちらへどうぞというのです。ついて行くと其処には6人テーブルが作られていて例のマルベリーヤの四人組

がニコニコと私達を待っていてくれました。以後最終日までずっとこの六人で毎食を共にしたのです。たまたま六人テーブルがあって二人分あいていたのか、マルベリー組が私達を呼び込むために六人テーブルを作らせたのか、よくわかりませんがとにかく楽しいテーブルでした。

最年長のオジサンは年令60歳台後半、これ以上ないというくらいのお気楽オジサンで、セサミストリートのキャラクターにそっくりなので、早速セサミさんというニックネームを密かに献上しました。ひっきりなしにツワーツ・ワッハッハの連続で、この人お悔やみにはいけないんじゃないか、と心配になるくらい陽気なオジサンです。もう一人は60台半ば位でしょうか、ややコワモテですがとても細かく気が付くやさしい人でした。私達の親戚で、やはりコワモテのオジサンがいてその人にとっても雰囲気似ているので、この人はTさんと密かに呼ぶことにしました。

それぞれの奥さんも個性の強い面白い人たちで一週間楽しい食事が出来ました。

自由時間のアト遊覧船に乗り、養殖イカダの周りでメヒリヨーネス mejillones = ムール貝の茹でたて食べ放題・ビノ呑み放題。このホーダイというの、あまり体には良くありませんね。何せ午前中のオヤツにこれですからねー。オテルに帰ったらすぐ又呑み放題の昼食だというのに・・・。



(呑み放題、食べ放題の遊覧船、正味の時間は30分位だったから良かったものの、もっと長かったらどうなることやら)

でもビノはともかくこのムール貝は文句なし美味しかったです。条件は色々あると

と思いますが、冷たい綺麗な海水で育った事、茹でたてだったこと。これまでムール貝にはあまりいい印象をもっていなかったんですが、ずっと前チリの南部で食べたもの以来の美味しさでした。水温の低さはやはり関係があるのだろうと思っています。ご存知かもしれませんが、ムール貝を美味しく食べるには、身の中にあるモシャモシヤした黒っぽいもの（としか言いようがないんです）をはずすのがコツです。貝の成熟度によるのかどうか、無いのもありますが、これを食べてしまうと口の中でジャリっとくるので、いくら新鮮でもぶち壊しです。お試しアレ。



(この遊覧船オリジナルのラベルつきビーノ・ブランコ、味はイマイチ。アグア)

さて、遊覧船での呑み放題・食べ放題が終わるとバスに乗ってホテルに帰り、今度はスペインの人たちにとって一番大切な意味を持つ昼食・コミダ **comida** です。エッ、また食べるのかって？ 食べるんですよ、オオタベ。何とも旺盛な食欲です。今日のメニューはヒヨコマメのスープ、ポリヨ・アサード **pollo asado**=ロースト・チキン、エラード **helado**=アイス・クリーム、ビノ・デラ・casa **vino de la casa**=ハウスワインは勿論またもや呑み放題。そしてアトは夕方までお得意のシェスタ。

(2日目午後) サン・ヘンホ(Sanxenxo または Sangenjo)

綴りの前者はガリシア語、後者はカステヤーノ(標準語)。

朝のうちからたっぷり呑んで食べて、十分のおヒルネ、こんな生活を続けたらどうなってしまうか気の小さい私達は大いなる不安を抱くところですが、平均的スペイン人の胃袋はこんな事ではびくともしないらしく、午後の部17時のバス出発時間には全員すっきりした顔をそろえました。

17時という時間、私達の感覚ではオフィス・アワーのオワリ、即ち今日一日もそろそろオワリという感じになりますが、ここの人達にはシェスタあけで、さあもうヒト働き、又はもうヒト遊びという時間なのでしょう。

サン・ヘンホという所はカンバドスから南へ約30分のドライブ。午前中に行ったオグローベは西へ30分という位置関係です。全体の平均年齢は多分50歳台半ば位でしょうから、昨日の長旅のアトなので今日は近場でという配慮なのかも知れません。

カンバドスやオ・グローベが能登半島東海岸によく似た静かなたたずまいなのに較べサン・ヘンホという所は少し外海に向いた東伊豆又は南紀白浜という感じです。

ここも風光のよさではリアス・バハスでも有数の所なので、観光開発が進んでいて大きなホテル群が立ち並んだ所もあります。熱海ほどではないにしても伊東ぐらいにはなってしまうようです。よそ者が勝手にナッテシマッテイル、などというのはおこがましいかもしれませんが、自然のいい所ほど自然破壊が進むという矛盾は何とかならんモンでしょうか？ そういう所へ住みたいと望む私達自身もまた矛盾の片棒担いでいる事になるのですが・・・。

ここもリゾート地ではありますが観光名所ではないので名所旧跡の見学はなし。着いたらすぐ解散、自由行動。私達に限らず皆自由行動は大歓迎の様子です。

私達はまず不動産屋探し。こういういい所を知った以上はカディスに限らずとにかくコスタ・デル・ソルから抜け出したい。本当のスペインに住みたい。

それにはまず広く情報を集めなくてはというわけです。パック・ツアーにきて不動産屋を漁って歩くとはやはり変わった客でしょうか。不動産代理店を二軒と観光案内所で資料を集めてから港へ行ってみました。綺麗な砂浜が広がる海岸通りのほぼ中央に

漁港兼ヨットハーバーがあります。ついこの間まで地元住民は周りの景色の良さなどにはトンと気づかず漁業一本槍で生活してたんでしょうね。だから最もいいロケーションに漁港がデンと構えているんです。その漁港もいまは六割方はマリーナと化して

ヨットに占拠され、漁船は遠慮っぽく隅に追いやられている感じです。

これを見るとここはもう駄目だ、と思います。案の定この町はどんどん新しい建築工事が進んでいて、その殆どはホテルやリゾート・マンションのようでした。

この町などは決して交通の便はよくないのです。そういう意味では西伊豆です。だから一般庶民が車を持つようになってからの開発であることは間違いないところです。

それまではごく一部のお金持ちの隠れリゾートだったに違いありません。

港では今夜は夏のフェリアでもやるらしく色々飾り付けをしたり屋台の支度をしたりしていました。夏の終わりに、夏を送るような意味でお祭りをやるんでしょうか。

写真の右手の岸壁には大勢のハダカンボがいて、次々と女の子の手足を掴んで海に放り投げては自分たちも飛び込んでいました。投げられる女の子の方も半ば逃げ腰、半ば嬉しそうにに放り込まれていました。これも何か意味のある行事なんでしょうね。



(ヨットのマストが林立する漁港、いまや殆どマリーナ)

少々歩きつかれたので、マリーナを見渡せるカフェ・テラーサで海風にふかれながら
今日はおとなしくスモ・デ・ナランハ **sumo de naranja**=オレンジ・ジュース。
なのに、ついてきたオツマミは揚げたピーナッツ。なんじゃこりゃ、セルベサのツマ
ミじゃないの。なにがなんでも吞ませようという魂胆か？



(漁港の外はこんな様子、波静かで遠浅の入り江、子供・年寄り向き)

ホテルに帰ったのは20時過ぎ。夕食は今日から定刻、といっても21時。昼食14時から15時、夕食21時から22時、シェスタは15時から17時ぐらいまでというのが一般的なパターン。尤も夕食時間に関しては忙しいニッポンの皆さんもあまり変わらないんでしょうか？ 本日のメイン・ディッシュはまたまたメルルーサ。

でも今度はメルルーサ・ア・ラ・ガリエーガ **merluza a la gallega**。メルルーサを根菜と一緒にスープで煮込んだ物、ガリシア風です。味はマル。ブーイングもなし。

明日は少し遠出なので六時半の早起き、7時半出発。

夕食後町へ出てカフェ+ブランデー。なぜかホテルの食堂ではカフェがないんです。これは最後まで変わらず、大きなクエッション・マーク。レストランの定食、メニュー・デル・ディアの選択肢にもカフェは入っておらず、常に別注。??? 不可解。
